

児童期における男女交際の実態と恋愛観

大澤 愛海*・青柳 直子**

(2018年10月24日受理)

Survey of Actual Condition of Love Relationship and View of Love in Childhood

Narumi OSAWA and Naoko AOYAGI

キーワード:小学生, 男女交際, 恋愛関係, 恋愛観, 養護教諭

近年、児童期の男女交際が増加していることが懸念されている。一方で、その実態は明らかになっていないのが現状である。児童期の男女交際の背景には、相手への好意だけではなく、様々な要因があることが推測される。また、学校における男女交際に関する指導も不十分であることが考えられる。そこで本研究では、児童と養護教諭を対象に無記名式質問紙調査を実施し、児童期の男女交際の実態や児童の恋愛観について把握を行い、望ましい男女交際の推進や性的問題行動の未然防止に向け、養護教諭や学校として指導、支援すべき点について検討を行った。結果として、児童期の男女交際は増加傾向にあるが、その内容は学校内の関わりが主であり、性行動に繋がる事例は少ないことが推測された。しかし、児童と養護教諭間で男女交際に対する認識のズレがみられたり、男女交際が原因となって人間関係のもつれが生じる場合がみられたりする中で、養護教諭の多くは指導・支援の必要性を感じていた。養護教諭は活動の拠点である保健室の特性を生かし、情報収集をするとともに実態把握に努め、教職員や家庭と密に連携し、多くの目で児童を見守る体制作りの中核を担うことが重要であると考えられた。また、児童の実態は様々であることから、実態に即した個別指導の充実を図ることが効果的であると考えられた。

はじめに

近年、低年齢のうちに異性に興味や関心を抱いている者が増加傾向にあり¹⁾、それに伴い、児童期の男女交際が増加していることが懸念されている。一方で、男女交際に至る経緯や交際内容など、その実態は明らかになっていないのが現状である。

児童期の男女交際の背景には、相手への好意だけではなく、様々な要因があることが推測される。社会の変遷に伴う共働き世帯、ひとり親家庭の増加により²⁾、児童に対する保護者の時間的、精神的余裕は十分ではなく、その結果、児童は成長過程で必要な愛情や援助を十分に受けられてい——

*群馬県前橋市立荒砥中学校 **茨城大学教育学部

ない⁴⁾。谷本(2008)によれば、恋愛は「他者を求めるプロセス」であり、「自己のアイデンティティを保証できる契機」と述べられている⁵⁾。保護者からの愛情不足による寂しさを補填するため、「他者を求めるプロセス」、「自己のアイデンティティを保証できる契機」として恋愛をする児童がいることが考えられる。

また、小中学生の41%が日ごろ「恋愛や好きな人」の話をしていることから⁶⁾、友人間のコミュニケーション材料として恋愛が大きな意義を果たしており、恋愛をしていないと友人の輪に入れないなどの理由で彼氏・彼女を作る児童生徒もいると考えられる。そこには「みんなと同じが良い」といったグループ間同調圧力も影響していることが推測される。さらには、小中学生の交際はステータスになっており、恋愛を自分自身のアクセサリーとして考えている児童生徒もいると思われる。

加えて、児童期におけるスマートフォン所持率の増加⁷⁾やソーシャルネットワークの普及などが影響し、恋愛や性に関する情報に触れる機会が増加した。これらより、恋愛そのものへの憧れや性への関心が高まっていることも児童期の男女交際の背景要因のひとつだと考えられる。

児童期の男女交際の増加が懸念される一方で、小学校学習指導要領には男女交際に関する指導内容の記載はない。「異性への関心が芽生えること」⁸⁾、「望ましい人間関係の形成や男女の協力」⁹⁾、「異性についても理解しながら、人間関係を築いていくこと」¹⁰⁾などの記載はあるものの、男女交際を直接的に取り上げたものはなく、学校における指導は不十分であることが考えられる。誤った情報が行き交う情報化社会において、知識量の乏しい児童期の子どもが興味や関心から男女交際、性行動に及ぶことは、性の問題行動へ繋がる可能性がある。よって、児童期の男女交際の実態を明らかにしその実態に即した指導や支援を行うことは、児童の健やかな成長に繋がると考える。

そこで本研究では、児童期の男女交際の実態や、児童の恋愛観の把握を行い、望ましい男女交際の推進と性の問題行動の未然防止に向け、養護教諭や学校として指導、支援すべき点について検討することを目的とした。

研究方法

1. 調査内容

2017年11月～12月に、I県内の公立小学校4校の第5学年と第6学年の児童117名（第5学年31名、第6学年86名）と同県内の公立小学校20校の養護教諭20名を対象として、無記名式質問紙調査を実施した。質問票については学校訪問や郵送にて配布、回収を行った。

児童対象の質問票には「好きな異性に関すること」「男女交際に関すること」、養護教諭対象の質問票には「児童期の男女交際の実態」「児童期の男女交際に関する指導・支援」等の項目を設定した。得られた情報はExcel 2013を用い、集計と分析を行った。

2. 倫理面への配慮

本調査は無記名で行い、依頼した際に回答は強制ではないことや途中で止めることができること、得られた結果は研究目的以外には使用せず、回答した個人が特定されることはないことを書面にて説明した。調査票の提出をもって本調査への同意を得たものと判断した。

結果

<1>児童を対象とした質問紙調査

1. 対象者の基本的特性

配布数 117 名に対し、全体の回収数(回収率)は 112 名(95.7%)であり、有効回答数(有効回答率)は 112 名(100.0%)であった。対象者の学年と性別の内訳は、第 5 学年 28 名(25.0%)、第 6 学年 84 名(75.0%)、男子 56 名(50.0%)、女子 56 名(50.0%)であった。

2. 好きな異性に関すること

(1)好きな異性の有無

好きな異性の有無について、「いる」「いない」「今はいないが、前はいた」「わからない」の 4 件法で回答を得た(表 1)。全体では、「いる」52 名(46.4%)が最も多く、次いで「いない」30 名(26.8%)であった。男子では「いない」24 名(42.9%)が最も多く、次いで「いる」17 名(30.4%)の順で、女子では「いる」35 名(62.5%)が最も多く、次いで「今はいないが、前はいた」10 名(17.9%)の順であった。

また、この問いにおいて「いる」「今はいないが、前はいた」と回答した児童 68 名に、好きな異性への恋愛感情、好きな異性との関係について尋ねた。なお、「いる」と回答した児童 52 名には現在好きな異性を、「今はいないが、前はいた」と回答した児童 16 名には直近で好きだった異性を想定してもらい、回答を得た。

表 1 好きな異性の有無

	全体		男子		女子		第5学年(n=28)						第6学年(n=84)											
	(N=112)		(n=56)		(n=56)		男子(n=13)			女子(n=15)			総数(n=28)			男子(n=43)			女子(n=41)			総数(n=84)		
	N	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%		
いる	52	46.4	17	30.4	35	62.5	5	38.5	10	66.7	15	53.6	12	27.9	25	61	37	44						
今はいないが、前はいた	16	14.3	6	10.7	10	17.9	2	15.4	0	0	2	7.1	4	9.3	10	24.4	14	16.7						
いない	30	26.8	24	42.9	6	10.7	4	30.8	3	20	7	25	20	46.5	3	7.3	23	27.4						
わからない	14	12.5	9	16.1	5	8.9	2	15.4	2	13.3	4	14.3	7	16.3	3	7.3	10	11.9						

(2)好きな異性への恋愛感情

好きな異性への恋愛感情について、「その他」を含む 12 項目から回答を得た。なお、この問いは複数回答可とした。全体では、「その人に会うとうれしい」47 名(70.2%)が最も多く、次いで「その人のことをたくさん知りたいと思う」32 名(47.8%)の順に多かった。性別では、男子は「その人に会うとうれしい」14 名(60.9%)が最も多く、次いで「その人のことをたくさん知りたいと思う」11 名(47.8%)の順であった。女子は「その人に会うとうれしい」33 名(75.0%)が最も多く、次いで「その人と話すとドキドキする」21 名(47.7%)、「その人のことをたくさん知りたいと思う」21 名(47.7%)が同率であった。

(3)好きな異性との関係

好きな異性との関係について、「その他」を含む 10 項目から回答を得た。なお、この問いは複数回答可とした。全体では、「同じ小学校に通っている人」60 名(88.2%)が最も多く、次いで「彼

氏・彼女」13名(19.1%)の順に多かった。性別では、男子は「同じ小学校に通っている人」21名(91.3%)が最も多く、次いで「彼氏・彼女」7名(30.4%)、「おきななじみ」4名(17.4%)の順であった。女子は「同じ小学校に通っている人」39名(86.7%)が最も多く、次いで「彼氏・彼女」6名(13.3%)の順であった。

3. 男女交際に関すること

(1)男女交際の経験の有無

男女交際の経験の有無については、全体では「ある」者は32名(28.6%)であり、男子12名(12.4%)、女子20名(35.7%)であった。学年別では、「ある」者は第5学年では12名(42.9%)、第6学年では20名(23.8%)であった。

(2)男女交際のきっかけ・告白の手段

「今までに、異性と付き合ったことがありますか」という問いに対し、「ある」と回答した児童32名に、直近の男女交際のきっかけ、告白の手段について回答を得た。なお、告白の手段については、「その他」を含む5項目から回答を得た。

男女交際のきっかけについて、全体では、「好きな気持ちを相手から告白された」19名(59.4%)が最も多く、次いで「好きな気持ちを自分から告白した」12名(37.5%)の順であった。性別では、男子は「好きな気持ちを自分から告白した」7名(58.3%)が最も多く、次いで「好きな気持ちを相手から告白された」5名(41.7%)の順であった。女子は「好きな気持ちを相手から告白された」14名(70.0%)が最も多く、次いで「好きな気持ちを自分から告白した」5名(25.0%)の順であった。

告白の手段について、全体では、「直接会って話した」21名(65.6%)が最も多く、次いで「手紙」10名(31.3%)の順に多かった。また、性別、学年別にみても、「直接会って話した」が最も多く、次いで「手紙」の順であった。

(3)男女交際開始の理由

「今までに、異性と付き合ったことがありますか」という問いに対し、「ある」と回答した児童32名に、直近の男女交際における交際を開始しようと思った理由について、「その他」を含む14項目から回答を得た。なお、この問いは複数回答可とした。全体では、「好きだから」21名(67.7%)が最も多く、次いで「やさしいから」16名(51.6%)の順に多かった性別では、男子は「好きだから」9名(75.0%)が最も多く、次いで「かわいいから」6名(50.0%)、「やさしいから」6名(50.0%)が同率であった。女子は「好きだから」12名(63.2%)が最も多く、次いで「やさしいから」10名(52.6%)、「おもしろいから」10名(52.6%)が同率であった。

(4)男女交際の内容

「今までに、異性と付き合ったことがありますか」という問いに対し、「ある」と回答した児童32名に、直近の男女交際の内容について、「その他」を含む17項目から回答を得た。なお、この問いは複数回答可とした。全体では、「学校でおしゃべりする」21名(80.8%)が最も多く、次いで「プレゼントをする(される)」10名(38.5%)の順に多かった。性別では、男子は「学校でおしゃべ

りする」7名(77.8%)が最も多く、次いで「プレゼントをする(される)」4名(44.4%)の順であった。女子は「学校でおしゃべりする」14名(82.4%)が最も多く、次いで「グループであそびに出かける」6名(35.3%)、「プレゼントをする(される)」6名(35.3%)が同率であった。

(5)男女交際をする際に最も参考にしているもの

男女交際をする際に最も参考にしているものについて、「その他」を含む8項目から回答を得た。全体では、「特になし」64名(60.4%)が最も多く、次いで「ドラマ」17名(16.0%)の順に多かった。性別では、男子は「特になし」38名(74.5%)が最も多く、次いで「ドラマ」8名(15.7%)であった。女子は「特になし」26名(47.3%)が最も多く、次いで「友達の話」10名(18.2%)の順であった。

(6)破局経験の有無・破局理由

破局経験の有無について、3件法で回答を得た。全体では、「ない」69名(65.1%)が最も多く、次いで「わからない」20名(18.9%)、「ある」17名(16.0%)の順に多かった。性別では、男子は「ない」35名(68.6%)が最も多く、次いで「ある」8名(15.7%)、「わからない」8名(15.7%)が同率であった。女子は、「ない」34名(61.8%)が最も多く、次いで「わからない」12名(21.8%)、「ある」9名(16.4%)の順であった。

また、「彼氏・彼女と別れたことがありますか」という問に対し、「ある」と回答した児童17名に、破局理由として最もあてはまるものについて、「その他」を含む9項目から回答を得た。全体では、「別れた理由はわからない」6名(35.3%)が最も多かった。性別では、男子は「友達にもどった方がよいと思ったから」3名(37.5%)、「別れた理由はわからない」3名(37.5%)が同率であった。女子は「別れた理由はわからない」3名(33.3%)、「その他」3名(33.3%)が同率であった。

4. 家庭での恋愛に対する態度

(1)家庭での恋愛に関する会話の頻度

家庭での恋愛に関する会話の頻度について、5件法で回答を得た。全体では、「まったくしない」52名(46.4%)が最も多く、次いで「ほとんどしない」27名(24.1%)の順に多かった。また、性別でみても「まったくしない」が最も多く、次いで「ほとんどしない」の順であった。

(2)家庭での恋愛に関する会話の内容

「恋愛に関して家族と話をしますか」という問に対し、「よくする」「たまにする」と回答した児童30名に、会話の内容について、「その他」を含む6項目から回答を得た。なお、この問いは複数回答可とした。全体では、「友達の恋愛の話をする」13名(43.3%)が最も多く、次いで「自分の恋愛について相談する」11名(36.7%)、「恋愛に関する本や漫画、ドラマの話をする」11名(36.7%)が同率であった。性別では、男子は「友達の恋愛の話をする」4名(44.4%)が最も多く、次いで「好きな異性のタイプについて話をする」3名(33.3%)の順であった。女子は「自分の恋愛について相談する」10名(47.6%)が最も多く、次いで「友達の恋愛の話をする」9名(42.9%)、「恋愛に関する本やマンガ、ドラマの話をする」9名(42.9%)が同率であった。

5. 恋愛観

恋愛に対して抱くイメージ、恋愛に対する積極性、交際人数に対する考え方、恋愛に対する理想像について、自分自身の考えに最も近い数字を5段階から1つ選択する形式で回答を得た。

恋愛に対して抱くイメージにおいて、全体では、「恋愛はたのしそうだと思える者」61名(55.5%)が最も多く、次いで「どちらでもないと思える者」26名(23.6%)の順に多かった。性別では、男子は「恋愛はたのしそうだと思える者」19名(35.2%)、「恋愛はつまらなそうだと思える者」19名(35.2%)が同率で多かった。女子は「恋愛はたのしそうだと思える者」42名(75.0%)が最も多く、次いで「どちらでもないと思える者」10名(17.9%)の順であった。

恋愛に対する積極性において、全体では、「恋愛がしたいと思える者」49名(44.6%)が最も多く、次いで「どちらでもないと思える者」35名(31.8%)の順に多かった。性別では、男子は「恋愛はしたくないと思える者」21名(38.9%)が最も多く、次いで「どちらでもないと思える者」19名(35.2%)の順であった。女子は「恋愛がしたいと思える者」35名(62.5%)が最も多く、次いで「どちらでもないと思える者」16名(28.6%)の順であった。

交際人数に対する考え方において、全体では、「どちらでもないと思える者」55名(50.5%)が最も多く、次いで「1人と交際すれば十分と思える者」37名(33.9%)の順に多かった。性別では、男子は「どちらでもないと思える者」29名(54.7%)が最も多く、次いで「1人と交際すれば十分と思える者」19名(35.9%)の順であった。女子は「どちらでもないと思える者」26名(46.4%)が最も多く、次いで「1人と交際すれば十分と思える者」18名(32.1%)の順であった。

恋愛に対する理想像において、全体では、「ロマンチックな恋愛はしたくないと思える者」47名(43.1%)が最も多く、次いで「どちらでもないと思える者」43名(39.5%)の順に多かった。性別では、男子は「ロマンチックな恋愛はしたくないと思える者」28名(52.83%)が最も多く、次いで「どちらでもないと思える者」22名(41.5%)の順であった。女子は「どちらでもないと思える者」21名(37.5%)が最も多く、次いで「ロマンチックな恋愛はしたくないと思える者」19名(33.9%)の順であった。

6. 児童期の男女交際に対する賛否

児童期の男女交際に対する賛否について、全体では、「よいと思う」38名(33.9%)が最も多く、次いで「わからない」29名(25.9%)の順に多かった(表2)。性別では、男子は「わからない」20名(35.7%)が最も多く、次いで「よいと思う」13名(23.2%)の順であった。女子は「よいと思う」25名(44.6%)が最も多く、次いで「どちらかというよいと思う」15名(26.8%)の順であった。

表2 小学生の男女交際についての考え

	全体		男子		女子		第5学年(n=28)						第6学年(n=84)					
	(N=112)		(n=56)		(n=56)		男子(n=13)		女子(n=15)		総数(n=28)		男子(n=43)		女子(n=41)		総数(n=84)	
	N	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
よいと思う	38	33.9	13	23.2	25	44.6	3	23.1	6	40	9	32.1	10	23.3	19	46.3	29	34.5
どちらかというよいと思う	25	22.3	10	17.9	15	26.8	2	15.4	5	33.3	7	25	8	18.6	10	24.4	18	21.4
どちらかというよいと思わない	12	10.7	6	10.7	6	10.7	1	7.7	0	0	1	3.6	5	11.6	6	14.6	11	13.1
よくないと思う	8	7.1	7	12.5	1	1.8	0	0	0	0	0	0	7	16.3	1	2.4	8	9.5
わからない	29	25.9	20	35.7	9	16.1	7	53.8	4	26.7	11	39.3	13	30.2	5	12.2	18	21.4

7. 男女交際におけるステータスの有無

彼氏・彼女がいること、彼氏・彼女がいる人に対する印象を問う対となる5組の項目における「肯定的である者」「否定的であるもの」「どちらでもない者」を合算し、「男女交際をステータスであると感じている者」「男女交際をステータスであると感じていない者」「どちらでもない者」の3つにカテゴリ分けをした。全体では、「どちらでもない者」283名(52.1%)が最も多く、次いで「男女交際をステータスであると感じている者」197名(36.3%)の順に多かった。また、性別にみても、「どちらでもない者」が最も多く、次いで「男女交際をステータスであると感じている者」の順であった。

8. 家庭環境と恋愛・男女交際との関連

(1)両親との同居の有無との関連

1)両親との同居の有無と好きな異性の有無との関連

両親と同居している家庭「1群」では「いる」49名(49.5%)が最も多く、次いで「いない」24名(24.2%)の順であった。ひとり親家庭「2群」では「いない」6名(46.2%)が最も多く、次いで「いる」3名(23.1%)の順であった。

2)両親との同居の有無と恋愛感情との関連

恋愛感情「その人といっしょにいると安心する」に関しては、両親と同居している家庭「1群」では、「当てはまる」15名(24.2%)であった。ひとり親家庭「2群」では、「当てはまる」は2名(4.0%)であった。

恋愛感情「その人にとっていちばん大切な人になりたい」に関しては、両親と同居している家庭「1群」では、「当てはまる」14名(22.6%)であった。ひとり親家庭「2群」では、「当てはまる」は2名(40.0%)であった。

恋愛感情「家族や友達といっしょにいるよりも、その人といっしょにいる方が楽しい」に関しては、両親と同居している家庭「1群」では、「当てはまる」8名(12.9%)であった。ひとり親家庭「2群」では、「当てはまらない」は5名(100.0%)であった。

3)両親との同居の有無と男女交際の経験の有無との関連

両親と同居している家庭「1群」では、「ある」は28名(28.3%)であった。ひとり親家庭「2群」では、「ある」は4名(30.8%)であった。

(2)兄弟姉妹構成との関連

1)兄弟姉妹構成と好きな異性の有無との関連

兄弟姉妹がいる「3群」では、「いる」49名(47.5%)が最も多く、次いで「いない」29名(28.2%)の順であった。兄弟がいる「4群」では、「いる」29名(49.2%)が最も多く、次いで「いない」15名(25.4%)の順であった。一人っ子「5群」では、「いる」6名(66.7%)が最も多く、次いで「今はいないが、前はいた」2名(22.2%)の順であった。

2)兄弟姉妹構成と男女交際の経験の有無との関連

兄弟姉妹を持つ「3群」では、「ある」27名(26.2%)であった。兄弟がいる「4群」では、「ある」は16名(27.1%)であった。一人っ子「5群」では、「ある」は5名(55.6%)であった。

(3)家庭での恋愛に対する態度との関連

1)家庭での恋愛に関する会話の頻度と好きな異性の有無との関連

恋愛に関して家族と話を「よくする」と回答した者では、「いる」7名(100.0%)が最も多かった(表3)。恋愛に関して家族と話を「たまにする」と回答した者では、「いる」16名(45.7%)が最も多く、次いで「今はいないが、前はいた」6名(26.08%)の順であった。恋愛に関して家族と話を「ほとんどしない」と回答した者では、「いる」14名(51.6%)が最も多く、次いで「いない」6名(22.2%)の順であった。恋愛に関して家族と話を「まったくしない」と回答した者では、「いない」23名(44.2%)が最も多く、次いで「いる」16名(30.8%)の順であった。

表3 家庭での恋愛に関する会話の頻度と好きな異性の有無との関連

	好きな異性の有無								
	いる		今はいないが、前はいた		いない		わからない		
	n	%	n	%	N	%	n	%	
よくする(n=7)	7	100	0	0	0	0	0	0	0
たまにする(n=23)	16	45.7	6	26.1	0	0	1	4.3	
ほとんどしない(n=27)	14	51.9	1	3.7	6	22.2	6	22.2	
まったくしない(n=52)	16	30.8	7	13.3	23	44.2	7	13.5	
わからない(n=3)	0	0	2	66.7	1	33.3	0	0	

2)家庭での恋愛に関する会話の頻度と男女交際の経験の有無との関連

交際経験が「ある」者が恋愛に関して家族と話をする頻度は「よくする」3名(42.9%)、「たまにする」11名(47.8%)、「ほとんどしない」9名(33.3%)、「まったくしない」9名(17.3%)であった。

<2>養護教諭を対象とした質問紙調査

1. 対象者の基本的特性

対象者はI県内の公立小学校20校の養護教諭20名とした。回収数(回収率)は15名(75.0%)であり、有効回答数(有効回答率)は15名(100.0%)であった。

2. 男女交際を開始するのに適切であると考える発達段階

男女交際を開始するのに適切であると考える発達段階について、「その他」を含む5項目から回答を得た。なお、この問いは複数回答可とした。「適切でない」11名(78.6%)が最も多く、次いで

「高学年」2名(14.3%)の順に多かった。

3. 養護教諭における児童の恋愛事情の把握状況

(1)恋愛に関する話をされる頻度

児童から恋愛に関する話をされる頻度について、4件法で回答を得た。「時々ある」12名(80.0%)が最も多く、次いで「よくある」1名(6.7%)の順に多かった。

(2)恋愛に関する話の内容

「児童から恋愛に関する話をされることはありますか」という問いに対し、「よくある」「時々ある」と回答した13名に対し、話の内容について、「その他」を含む10項目から回答を得た。なお、この問いは複数回答可とした。「付き合っていない好きな異性との出来事に関する話」9名(69.2%)が最も多く、次いで「友人の好きな異性に関する話」8名(61.5%)、「男女交際をしている友人に関する話」8名(61.5%)が同率であった。

4. 児童期の男女交際に関する指導・支援

児童期の男女交際に関する指導の必要性を感じる頻度について、4件法で回答を得た。「時々ある」7名(46.7%)が最も多く、次いで「あまりない」6名(40.0%)の順に多かった。

「小学生の男女交際に関して、指導・支援の必要性を感じたことはありますか」という問いに対し、「よくある」「時々ある」と回答した9名に、必要だと思われる指導・支援内容について、全21項目から回答を得た。なお、この問いは複数回答可とした。

「児童に対する個別指導」に関しては、「異性との関わり方」7名(77.8%)が最も多く、次いで「付き合う上で気を付けること」6名(66.7%)の順に多かった。「その他」の回答としては、「SNS利用上のトラブル防止」「友人の好きな異性のことを周囲に話してしまうこと」などが挙げられた。

「児童に対する集団指導」に関しては、「異性の心理」6名(66.7%)、「異性との関わり方」6名(66.7%)が同率で最も多かった。「その他」の回答としては、「保健学習」「思春期の心の変化について」が挙げられた。

「保護者に対する啓発」に関しては、「保護者向けの講演会の実施」5名(55.6%)が最も多く、次いで「家庭でのルール作り」3名(33.3%)の順であった。「その他」の回答としては、「子どもが恋愛について関心があるという実態を知ってもらうこと」「実情(現在の状況)」が挙げられた。

5. 男女交際・恋愛に関する考えや意見

男女交際・恋愛に関する考えや意見について、自由記述式で回答を得た。「男女交際に限らず、良好な人間関係を築けるよう指導することが重要である」「担任や家庭と連携しながら情報収集・共有し、指導することが重要である」「深刻な事例に出会ったことはほとんどない」という記述が多くみられた。

考察

<1>児童を対象とした質問紙調査

1. 好きな異性に関すること

(1)好きな異性の有無

好きな異性の有無に関しては、「いる」者が46.4%であり、全体の半数近くに現在好きな異性がいることが明らかとなった。秋田ら(2004)の小学生対象の調査結果(47.3%)¹²⁾と同様の結果が得られた。性別では、好きな異性が「いる」と回答した男子が30.4%であるのに対し、女子は62.5%と半数以上が「いる」と回答していた。東京都性教育研究会の調査¹³⁾においても女子が多く、秋田ら(2004)の調査¹⁴⁾においても同様であった。これらの結果から、女子の方が身体の発育だけでなく精神の発達も早いことが考えられた。

(2)好きな異性への恋愛感情

好きな異性への恋愛感情に関しては、「その人に会うとうれしい」との回答が最も多かった。これは宮武ら(1996)による中学生の好きな異性への恋愛感情の調査結果¹⁵⁾と同様であり、小学校高学年と中学生とでは恋愛感情に大きな差はないことが推測された。

(3)好きな異性との関係

好きな異性との関係に関しては、「同じ小学校に通っている人」と回答した割合が88.2%であり、最も多かった。児童期の恋愛は、学校でともに生活していく中で好意が芽生え男女交際に至るものであり、ほとんどが学内での人間関係に留まっていることが推測された。また、「年上の人」「年下の人」と回答した者の割合は低いことから、相手は同級生であることが多いと考えられた。

「彼氏・彼女」との回答が13名みられたことから、本調査において現在男女交際をしている児童は13名(19.1%)であると推測された。秋田ら(2004)が行った児童211名を対象とした調査¹²⁾においては9.0%という結果であり、本調査ではそれよりも約1割多いという結果が得られ、児童期の男女交際が増加傾向にあることが考えられた。

2. 男女交際に関すること

(1)男女交際の経験

男女交際の経験が有る者は28.6%(32名)であった。性別では、「ある」と回答した男子が21.4%であるのに対し、女子は35.7%で、男子を上回る結果であった。女子の方が身体の発育だけでなく精神の発達も早いことや、恋愛に対する関心が高いことが要因であると考えられた。

(2)男女交際のきっかけ・告白の手段

男女交際のきっかけに関しては、「好きな気持ちを相手から告白された」との回答が59.8%で半数以上であった。性別では、「好きな気持ちを自分から告白した」が男子58.3%、女子25.0%で男子の方が多かった。また、女子は「好きな気持ちを相手から告白された」が70.0%と多かった。これらより、交際開始のきっかけとしては、恋愛に対して関心の低い男子の方から告白していることが多いことが推測された。男子全体では恋愛に対する関心は低いものの、一部の男子は恋愛

に対して関心が高く、積極的であることが推測された。また、「その他」として「恋愛に関する話をしていて、何となく付き合うということになった」との回答を得た。「何となく」という記述から、相手への好意ではない興味関心から交際に至る事例もあることが推測された。

告白の手段に関しては、「直接会って話した」が最も多かった。小島ら(2007)による調査¹⁹⁾においても告白の手段として最も多いのは「直接対面」であり、同様の結果が得られた。

(3)男女交際開始の理由

男女交際開始の理由に関しては、「好きだから」が67.7%で最も多かった。「かっこいいから」「かわいいから」などの外見的要素よりも、「やさしいから」「おもしろいから」などの内面的要素を回答した割合が多いことから、小学生は外見よりも内面を重視していることが考えられた。性別では、女子において「特に断る理由がなかったから」と回答した割合が男子よりも多かった。また、「彼氏・彼女が欲しかったから」「付き合うことに興味があったから」「周りの友達に彼氏・彼女がいて、みんなと同じがよかったから」「彼氏・彼女がいることが、かっこいいと思ったから」などの回答もみられ、恋愛に対する関心が高い女子は、その興味関心から男女交際に至っていることが推測された。児童期の男女交際の最大の背景要因は「相手への好意」ではあるものの、仮説としていた「恋愛そのものへの憧れ」「彼氏・彼女がいる状態がステータスだとされる風潮」「グループ間同調圧力」も一部影響している可能性があることが本調査の結果より推測された。

(4)男女交際の内容

男女交際の内容に関しては、「学校でおしゃべりする」80.8%が最も多く、次いで「プレゼントをする(される)」38.5%、「グループで遊びに出かける」34.6%であった。これらの結果より、児童期の男女交際の内容としては、学校内での関わりが主であり、2人きりで何かをするというよりも友人を交えてグループ交際をする、クリスマスやバレンタインなどイベントの際にプレゼントをし合うというような内容であることが明らかになった。「手をつなぐ」は11.5%と少なく、性行動につながるような事例は本調査においてはみられなかった。

(5)男女交際をする際に最も参考にしているもの

男女交際をする際に最も参考にしているものに関しては、「特になし」60.4%が最も多く、次いで「ドラマ」16.0%であった。「インターネット」「マンガ・アニメ」は3.3%と少なく、インターネットやマンガから誤った情報を入手している可能性は低いことが考えられた。性別では、女子において「友達の話」「兄弟姉妹の話」の割合が男子よりも多かった。恋愛に関する話を好んでする女子は、そこで得た情報を参考とし、自分自身の恋愛に反映させていることが推察された。

(6)破局経験とその理由

破局経験の有無に関しては、破局経験がある者は17名(16.1%)であった。交際経験があると回答した者が32名であるため、そのうちの半数以上が破局を経験しているという結果であり、児童期の男女交際の持続性は短いと考えられた。また、宮武ら(1996)は、中学生の恋愛のほとんどが、高校進学やクラス替えなどの環境の変化をきっかけにそれまでの関係や気持ちを維持できな

くなると述べており¹¹⁾、小学生も同様であると考えられた。

破局理由としては、「別れた理由はわからない」が35.3%で最も多かった。このことから、お互いの意思疎通ができていないまま破局に至っている場合が多いことが推測された。

3. 家庭での恋愛に対する態度

家庭での恋愛に関する会話に関しては、「まったくしない」が46.4%で最も多かった。性別では、男子において「まったくしない」と回答した割合が女子よりも3割程度多く、自分の恋愛や好きな異性の話をするに抵抗を感じている男子の様子がうかがえた。

家庭での恋愛に関する会話の内容としては、「友達の恋愛の話をする」が43.3%で最も多かった。養護教諭を対象とした本調査において、児童からされる恋愛に関する話の内容を尋ねたところ、「友人の好きな異性に関する話」「男女交際をしている友人に関する話」がともに61.5%と多かった。これらの結果から、恋愛に関する話において児童は自分自身の話よりも友人の話を選んですることが推測された。性別では、「自分の恋愛について相談する」と回答した女子の割合が男子より多く、女子の半数近くは家庭で自分自身の恋愛について話していることが明らかになった。このことから、女子の保護者は児童の恋愛状況がある程度把握しているのではないかと考えられた。

4. 恋愛観

恋愛に対して抱くイメージ、恋愛への積極性においては、「恋愛は楽しそう」「恋愛がしたい」と、恋愛に対して肯定的に考える者が多かった。しかし性別では、女子の半数以上が恋愛に対して肯定的であるのに対し、男子は恋愛に対して否定的である割合が多く、恋愛に対する関心の強さの違いがここでもみられた。男子は恋愛に対して無関心または否定的な傾向があり、女子は肯定的な傾向があることが推測された。

交際人数に対する考え方については、「どちらでもない考える者」が最も多かった。性別では、男子に比べ、女子の方が「多くの人と交際したい」と考える者が多かった。宮部ら(1996)の中学生対象の調査¹¹⁾において、男子よりも女子の方が「たくさん恋をしたい」という願望が強いことが明らかになっており、小学生についても同様の結果が得られた。

恋愛に対する理想像については、「ロマンチックな恋愛はしたくないと考える者」が最も多かった。宮部ら(1996)の中学生対象の調査¹¹⁾においては、中学生はロマンチックな恋愛に憧れていることが明らかになっており、この点において小学生と中学生で違いがみられた。

5. 男女交際におけるステータス

全体では、「どちらでもない考える者」が52.1%と半数以上を占め、次いで「男女交際をステータスであると感じている者」「男女交際をステータスでないと感じている者」の順に多かった。よって、本調査では彼氏・彼女がいる状態がステータスとなっているという仮説は実証できなかった。性別では、男子よりも女子において「ステータスである」と考える割合が多く、「ステータスでない」と考える割合が少なかった。よって、女子においては、男女交際がステータスとなっている可能性があると考えられた。

6. 児童期の男女交際に対する賛否

児童期における男女交際に対しては、「よいと思う」33.9%が最も多く、全体で見ると児童は自分自身の男女交際に関して寛容的であった。性別では、女子において「よいと思う」「どちらかというといよいと思う」が7割を超え、寛容的な様子が顕著であった。恋愛に対する関心が高い女子は恋愛に対する憧れもあることから、男子よりも肯定的にとらえ寛容的であることが推測された。

7. 家庭環境と恋愛・男女交際との関連

(1)両親との同居の有無との関連

「恋愛感情」に関しては、「その人といっしょにいると安心する」「その人にとっていちばん大切な人になりたい」と回答した割合は「ひとり親家庭」群の方が「両親と同居している家庭」群よりも多かった。ひとり親家庭の児童が感じている寂しさが影響していると考えられ、「ひとり親家庭」群では好きな異性に対する依存度が高いことが推測された。また、「男女交際の経験」がある割合は「両親と同居している家庭」群よりも「ひとり親家庭」群の方がやや多かった。これらより、児童期の男女交際の背景要因として寂しさの補填が影響している可能性が示唆された。

(2)兄弟姉妹構成との関連

「好きな異性」に関しては、「いる」割合が「一人っ子」群において最も多かった。「男女交際の経験」に関しても、「ある」割合が「一人っ子」群で最も多かった。これらの結果より、兄弟姉妹のいない一人っ子は人との関わりを多く求めていることが推察された。

(3)家庭での恋愛に対する態度との関連

「好きな異性」に関しては、恋愛に関して家族と話を「よくする群において、すべての者が「いる」と回答した。また、「男女交際の経験」に関しては、恋愛に関して家族と話を「よくする」群、「たまにする」群において「ある」と回答した割合が、「ほとんどしない」群、「まったくしない」群に比べて多かった。家庭での恋愛に関する態度が開示的である方が、児童は恋愛に関して積極的になることが推察された。よって、児童期の男女交際に関する指導・支援においては、家庭での教育力も重要となるため、学校と家庭との連携が欠かせないことが考えられた。

<2> 養護教諭を対象とした質問紙調査

1. 男女交際を開始するのに適切であると考え発達段階

男女交際を開始するのに適切であると考え発達段階に関しては、「児童期の男女交際は適切ではない」と考える者が約8割であった。大多数が児童期の男女交際に対して否定的であり、児童と養護教諭とで認識の違いがみられた。児童期の男女交際に関して指導・支援をする際には、養護教諭はこの認識のズレを考慮した上で対応をすることが重要であることが示唆された。

2. 養護教諭における児童の恋愛事情の把握状況

児童から恋愛に関する話をされる頻度に関しては、「よくある」「時々ある」が8割以上であり、児童は養護教諭に対して恋愛に関する話を高い頻度で行っていることが明らかとなった。「誰

でもいつでも利用でき、安心して話ができる」という保健室の特性や、養護教諭が日頃から構築している児童との信頼関係により、児童が自分自身に関する様々な情報を養護教諭に話しやすいということが背景としてあると考えられる。養護教諭はこのような立場を生かして適切な情報収集・共有をし、指導・支援に中心的立場から関与していく必要があると考えられた。

児童からされる恋愛に関する内容に関しては、「付き合っていない好きな異性との出来事に関する話」が最も多く、次いで「友人の好きな異性に関する話」「男女交際をしている友人に関する話」であった。友人に関する話をする割合は6割で多くみられたことから、養護教諭は児童の恋愛事情を本人からの情報としてではなく、周囲から得ていることの方が多いと推測された。

3. 児童期の男女交際に関する指導・支援

児童期の男女交際に関する指導・支援に関しては、半数以上が指導・支援の必要性があると回答しており、学校現場において男女交際に対する指導・支援が求められていることが明らかとなった。必要だと思われる指導・支援内容に関して、個別指導、集団指導ともに「異性との関わり方」がそれぞれ77.8%、66.7%と多く、異性との関わりにおいて問題点が多くみられることが推測された。個別指導については、「異性との関わり方」に次いで、「付き合う上で気を付けること」が66.7%で多かった。また、「その他」の回答において、「SNS 利用上のトラブル防止」「友人の好きな異性のことを周囲に話してしまうこと」が挙げられた。児童の実態は様々であり、恋愛や男女交際に対する興味関心や積極性も個人差が大きいことから、実態に即した細かな個別指導・支援が随時必要であると考えられた。実態に即した適切な指導を行うために、養護教諭は児童との信頼関係の構築に努めたり、恋愛や男女交際をはじめとする人間関係の話や相談をしやすい関係づくりを心掛けたりするなどし、実態把握をしつつ問題の早期発見に努める必要があると考えられた。

集団指導については、「異性の心理」「異性の関わり方」と回答した割合が多かった。集団に対しては、性別による身体や心理の違いなど大きな枠組みでの指導を重要視していると考えられた。

保護者への啓発については、「保護者向けの講演会の実施」が55.6%で多かった。「その他」では「子どもが恋愛について関心があるという実態を知ってもらうこと」「実情」が挙げられた。学校から家庭へ情報発信をし、学校と家庭とが連携して児童を見守っていくことが重要である。

4. 男女交際・恋愛に関する考えや意見

男女交際・恋愛に関する考えや意見に関しては、「男女交際に限らず、良好な人間関係を築けるよう指導することが重要である」「担任や家庭と連携しながら情報収集・共有し、指導することが重要である」「深刻な事例に出会ったことはほとんどない」という記述が多くみられた。これらの結果より、本調査の対象校においては性的問題行動に繋がるような望ましくない男女交際は少ないことが推測された。また、児童期においては、男女交際に限らず相手を尊重する気持ちや良好な人間関係を築くためのコミュニケーション能力を養うことが求められていると考えられた。養護教諭は、児童から様々な話をされやすい立場であることから、より詳細な児童の実態把握に努め、知り得た情報を教職員、時には家庭と共有し、多くの目で児童を見守る体制作りの中核を担うことが、様々な問題の未然防止に繋がると考えられた。

また、「男女交際が原因で友人関係が崩れ、問題化するケースがある」「ゲーム感覚で告白しあ

う」という事例もみられた。男女交際が原因となって人間関係のもつれが生じていたり、遊びのツールとなっていたりする現状があることも分かった。このように児童の実態は様々であることから、指導・支援にあたっては日頃から実態把握に努め、問題の早期発見に努めることが非常に重要であると考えられた。

まとめ

本研究によって、児童期の男女交際は増加傾向にあるが、その内容は学校内の関わりが主であり、2人きりで何かをするというよりも、友人を交えてグループ交際をする、イベントの際にプレゼントをし合うというようなものであり、性行動につながる事例はほとんどみられないと推測された。また、男女交際の背景要因としては「相手への好意」が最も多いものの、「恋愛そのものへの憧れ」「彼氏・彼女がいる状態がステータスだとされる風潮」「グループ間同調圧力」が要因となっている者も一部みられた。恋愛観に関しては、児童は恋愛に対して意欲的、肯定的であり、男女交際をすることにも抵抗が少ないことも明らかとなった。

一方で、養護教諭は児童期の男女交際に否定的な様子がみられ、児童と養護教諭間で男女交際に対する認識のズレがみられた。また、男女交際自体は特別問題視する必要はないとの意見がある一方で、男女交際が原因となり人間関係のもつれなど他の問題が生じているという事例もみられ、養護教諭の多くは指導・支援の必要性を感じていた。養護教諭は活動の拠点である保健室の特性を生かし、情報収集をするとともに実態把握に努め、教職員や家庭と密に連携し、多くの目で児童を見守る体制作りの中核を担うことが重要であると考えられた。また、児童の実態は様々であることから、実態に即した個別指導の充実を図ることが効果的であると考えられた。

学校における指導・支援をより充実させるため、対象数を増やし、実態把握をさらに詳細に進めていくことが今後の課題である。

謝辞

本調査を実施するにあたり、調査へのご理解とご協力を賜りましたI県の公立小学校の諸先生方ならびに児童の皆様へ、心より感謝申し上げます。

注

- 1) 東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会『児童・生徒の性—東京都小学校・中学校・高等学校の性意識・性行動に関する調査報告』（学校図書、2005）、8-39.
- 2) 内閣府男女共同参画局「共働き世帯数の推移」
http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h26/zentai/html/zuhyo/

- zuhyo01-02-08.html, 2017年11月7日閲覧.
- 3) 厚生労働省「ひとり親家庭等の現状について」
<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000083324.pdf>, 2017年11月7日閲覧.
 - 4) 増田彰則, 山中隆夫, 武井美智子, 平川忠敏, 志村正子, 古賀靖之, 鄭 忠和「子どもからみた家族機能の評価とそれに及ぼす家庭環境の影響」『心身医学』第44巻(2004), 851-860.
 - 5) 谷本奈穂『恋愛の社会学——「遊び」とロマンティック・ラブの変容』(青弓社, 2008).
 - 6) 白石信子, 中野佐知子「変わらず高いテレビの役割—2009年6月「小中学生のテレビ・メディア利用実態調査」から」『放送研究と調査』第60巻(2010), 66-83.
 - 7) 内閣府「第II部 調査の結果 第1章 青少年調査の結果 第1節 携帯電話の利用状況」
<http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h25/net-jittai/html/2-1-1.html>, 2017年11月7日閲覧.
 - 8) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 体育編』(東洋館出版社, 2008), 56-58.
 - 9) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別活動編』(東洋館出版社, 2008), 15-20.
 - 10) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2016/01/08/1356257_4.pdf, 2017年11月7日閲覧.
 - 11) 宮武朗子, 鈴木信子, 松井豊, 井上果子「中学生の恋愛意識と行動」『横浜国立大学教育紀要』第36巻(1996), 173-196.
 - 12) 秋田和子, 伊東久見子, 芝木美沙子, 笹嶋由美「小学生の性意識の実態調査」『北海道教育大学紀要(教育科学編)』第55巻(2004), 272-284.
 - 13) 小島奈々恵, 大田麻琴, 高本雪子, 深田 博己「恋愛における告白の成功・失敗の規定因」『広島大学心理学研究』第6巻(2007), 71-85.
 - 14) 富樫健二, 川島美奈「現代の性情報環境および発育発達に応じた性教育実施に向けて: 小学生の性情報環境に関する調査」『三重大学教育学部研究紀要(教育科学)』第48巻(1997), 59-71.